「名東図書館どくしょ会」　第１回　結果レポート

平成２５年１２月１４日（土）13：30－15：00　　名東図書館集会室

参加者　１１名（一般）

進行　　１名（名東図書館）

テーマ本　『それから』　夏目漱石/著

≪あらすじ≫

時は、明治後半期。長井代助は、帝大卒で 30 歳になるが、定職ももたず、親の援助で家をかまえ書生の門野とばあさんと暮らしている高等遊民。３年前に友人の妹の三千代と、同じく友人の平岡との仲を“義侠心にかられ”てとりもち、二人は結婚して地方へ赴任する。だが平岡は借金を作って会社辞職して帰京。三千代は代助に金の無心にくる。代助は自分の今の思いに忠実に生きることを決心し、三千代への思いを平岡にうちあけ、気のふれたように街に飛び出し電車にのる。

はじめに　どくしょ会の趣旨説明

名札作成

司：では、お一人ずつ、お名前とちょっとした自己紹介、デーマ本を５点満点で点数づけしてください。

い：読み応えはあった。どうどうめぐりをしている、今の若者にもにている。３点。

み：休み休み読んだ。時代はかわらないなあと思う。３点。

ま：初めて読んだ。一気に読んだ。最後は特に一気。ここまで書くか。みな愚直な人。４点。

松：ついていけない。ここまで悩むかな。私はあっさりしてる。男の人の考え。考えすぎ。３点.

加：速読で２時間前に読めた。言葉は難しいがすらすら読めた。戦前は姦通罪だろうが、今からみればたいしたことはない。ほんとに、代助は三千代を愛してたのか？2.5～3 点。

図：国語の元先生にきいたら難しい本だといわれた。新聞連載小説なのでどこで切ってもよみやすい。久しぶりに明治の父の時代に触れ、懐かしかった。５点。

伊：昔読んだ気がするが、初めて読むように新鮮。世相、文明評論が面白い。５点。

か：文学のにおいが好き。高校生で読んだ。村上春樹っぽいが、主人公が働いているがどうかが違う。3.8 点。

三：大学図書館で仕事をしている。大学とは違った側面で読書会に参加しにきた。３点。

ち：難しくて中身を読んでない。おととし「夜明け前」を苦労して読破。今日はあらすじを読んできただけ。よって、点数はなし。

の：一部読みです。電子ブックで読んだら全部にカナがふってありやめた。学生時代は高等遊民とかいやな話だと思った。今までの話を聞いて読んでみようと思った。点数なし。

司：一巡しましたので、これからはフリートークで、最初は、ほんとに代助は三千代を愛していたかな、というところから話をすすめてはどうでしょう。

〇：ほんとに愛して結婚するのかなと思った。代助は死ぬのかなとも思った。

〇：代助は、頭いいのに子どもじみて稚拙。知性が先走ってる。今の若者と反対。今は頭悪いけど行動はすぐにできる。肉体関係はないのは、本当かなと思った。さりげなく話がとんでいる。

〇：芸者遊びもしてたよね。

〇：明治の私の父は、株屋で、労働はすべきでないといっていた。

〇：父と兄はしっかり働いている。りっぱ。

〇：文明論としては現代と変わっていないと思った。三千代さんに対してあなたのもの、もらう、やる、って女性を“もの”としてみている。かなわないなあ。

〇：三千代は最後に強くなってる。時代に逆らっている。こういうところは、時代が違っても変わらないなあと思う。代助は３年ぶりにであって、回想の恋愛をしているようだ。

〇：「三四郎」の“それから”なのか、「それから」の“それから”なのかなと考えた。ストーカーにいく心理が面白い。これから、世間にでていくという“それから”なのかな。

〇：明治が時代的に離れていると思ったが、近いなあと思った。欧米に従わなくてはならないという代助の気持ちは現代に通じる。近代に抗いたい気持ちが感じられる。

〇：日本が、西洋のまねをしていることに漱石は怒っている。

○：でも、パンたべたり、紅茶のんだり、ピアノひいたり、十分西洋にかぶれている。

○：だから、漱石は悩むのだ。相反するのもが自分のなかにある。

○：世の中は貧しい。山の手の５％の階層を視野に発行する朝日新聞に連載された。何人が読めたのか。

○：朝日新聞は、新聞として格が上？

○：朝日新聞は日露戦争でもっと賠償をとれとあおっている。結構世俗的。

○：今は、新聞社の自分たちだけが上だとおもっている？

○：平岡はどうでしょう。

○：お父さんに手紙をかくのはすごい復讐だと思った。

○：自分の新聞ですればいいのに、なぜ、巻紙に膨大にかいたのか。

○：兄と父は関係ないから、代助だけへのすごい復讐。

○：代助と平岡は全く違う人間だ。どうして学生時代は仲がよかったのかな。

○：代助は香水をへやに垂らしたり、花をかいだり、へんな奴だ。今ならまだしも。

○：今でもそんな男性はいないのでは？（笑い）

○：武士的で、西洋かぶれ、労働を軽視してる。

○：友人の寺尾を漱石は引き合いにだして、働くのはつらくてみにくいといいたいのだ。

○：でも、漱石は働いている人を蔑視はしていない。コンプレックスもあるかな。

○：書生の門野は、ふつうの人だ。病気のおばさんに寝てればいいよと言っている。

○：門野はしなやかな人。この人に一番好感がもてる。

○：でも、あんまり将来のこと考えてないようだ。

○：どういう状況でも彼は、きちんと生きていける人間としてかかれている。

○：代助は三千代に告白してから一歩ふみだした。希望をもってよく生きてほしいと思う。応援したい。

○：どろどろしてたのを振り切って素（す）に戻った感じ。生きていこうって。

○：代助は破滅すると感じた。三千代さんも死ぬだろうし、いい人生になるわけない。

○：最後のずっと電車にのっていこうというシーンが印象的。ときどき、自分も地下鉄にのってこのまま乗っていこうと思うときがある。そんな時は、絶望している。

○：電車にのってずっと行こうというとき、希望を描いている本もよくある。

○：ハッピーエンドであってほしいと思ったが、違う。最後、目がいっちゃってる。解説よんでそう思った。漱石の晩年は暗いし。「坊ちゃん」は明るいけど。

○：三千代は魅力がない。どこがいいのわからない。しかし、三千代さんはかわいそう。お兄さんが死ななかったらもっとよかったろうに。

○：美人だったと思う。漱石の理想の女性。

○：平岡も、独身なら満州にいけるとか言ってる。一旗あげたかったんだ。昔はよくいた人。

○：三部作として読まなくていい。独立した小説として読めばいい。謎解きのような構成だ。

○：新聞小説だなと思う。日によって、いい時と悪い（読みづらい、つまらない）ときがある。

○：代助という名前は、“代わりに助ける”という意味だから、意味が深い。夫にかわってたすけるのかな。

○：お兄さんは“誠吾”ってすてき名前なのに。“代助”はその辺の人のよう。

○：高等遊民は、ほんとうは高学歴で貧乏な人。今もいる。それを漱石は、揶揄って金持ちのお坊ちゃんにしたようだ。

ほか、重松清の「百年読書会」の話、「坊ちゃん」、「三四郎」、「門」、なども話題になりる。